投稿

語彙は覚える？ 推測する？
―小学校での試み，多義語have研究―

竹田里香
Takeda Rika
（立命館大学外国語嘱託講師）

朝の電車の一風景として，中高生が英単語帳を開き，赤や緑のシートを当ててぶつぶつ呟きながら単語を覚えている姿を思い浮かべる方も多いだろう。私自身，高校の非常勤講師をしていた時，他の方法で語彙力をつけさせたいと思いながらも，毎回30～100個の単語テストを課していた。

2009年から小学校高学年で外国語活動が必修化され，2020年には，中学年で必修化，高学年で外国語が教科化された。また，4技能の「読むこと」，「書くこと」も導入されたことは大きな変化である。小学校外国語は，児童にとってはじめての外国語との出会いの場になる。その現場において，どのようなことを「教える」べきなのだろうか。全人教育を目指す小学校教育で，小学校教員は生きる力を育てようとしている。外国語の授業では，語彙や表現を単に覚えさせるだけでなく，異文化理解の視点も入れながら，体験的に学習させる。日本語（L1）を利用することでメタ言語能力を育て，「ことば」は面白い！と思う体験を多くさせる。そして，中学校以降の言語教育の動機づけや，個々の学習ストラテジーを見つけるのに役立つ小学校外国語であるべきではないだろうか。

そこで，「そうだ！大和田先生に聞いてみよう！」（『基礎英語 2』，NHK 出版）の中から，実践校である守口市立さつき学園北野ゆき教諭とともに，ことば教育向けに題材を選択し，小学校6年生用にアレンジを加えた。中学校に進むと，教科書で多くの英語に接することが増えてくるが，そんな時に英語に接して，難しい，わからない，と感じる生徒は多い。そうならないよう，動詞をまず把握して，動詞の周りにある知っている単語を手掛かりにその意味を推測してもらいたいという着想で，小中の橋渡しとして適切な項目を選んだ。日本語と英語のことばとしての共通基底部分を応用し，指導案を完成させた。

次に先行研究を踏まえ，今回の指導案について述べる。

You shall know a word by the company it keeps.　（Firth，1957）

これは，「一つの語はそれの交わる仲間によってその素性がしられるものである」（訳，大束，1975）と訳される。つまり，語の意味は周りにある語を見極めることで，初めてわかるということである。今回の have 研究で児童に体験してもらいたいことである。

今井（2007）は，動詞が指すのは「モノではなく，モノとモノのあいだにある関係」（p. 81）であり，モノとモノとのあいだにある関係こそに注目し，動詞般用の原則がわかっていれば，子どもははじめて出会った動詞でも，その意味を推論できるようになると思われる，と述べている。また，語彙学習の観点からも，推論を活用して，自分で語彙をどんどん増やしていくことができる（今井，2020a）とも言っている。このことも指導案作りに応用した。さらに，語彙学習の1つの方法として，「観察―仮定―検証」（Lewis，1993）の考えも参考にした。

「have 研究」という授業

今回行った授業の流れを次ページに示す。

②では，日本語の「のむ」と一緒によく使われる名詞（目的語）は何かと6年生に問うと，最初は水やジュースといった液体を挙げていたが，「薬，固唾，条件をのむ」なども出てきた。次に，「飲む」に一応相当する英語は drink であるが，児童が考えた目的語が英語では drink で言い表せるのかをクイズ形式で確かめた（例：drink milk とは言えるが，drink medicine とは言えない）。

① 事前テストを行う（Google Forms 利用）
② 日本語で「のむ」という動詞には，どんなものがありますか？【導入】
③「着ている」の英語は wear ですが，どのようなものと相性がよいかをみてみよう【導入】（図1）
④ 班で have の入っている文章がどんな意味かを考えてみよう【応用】（図2）
⑤ 黒板にアイディアをシェア【展開】
⑥ 振り返り

③では wear「身につけている」について考えさせ，下図を用い，wear と一緒に使うことのできるモノ（名詞）を示した。日本語ではそれぞれのモノ（名詞）にはどのような動詞が自然かを考えさせた（例：めがねをかける，靴下をはく）。

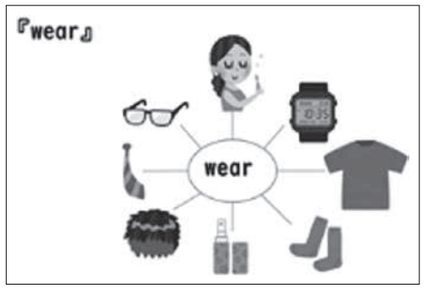

図1　wear と一緒に使えるモノ

そして，④では，英語の多義語の例として小学生に馴染み深い have を取り上げて，③で行ったように，have の自然な日本語を予測させた（図2）。

・I have a question.　・I have a pen in my hand.
・I have brown eyes.　・I had sushi for dinner.
・I have a headache.　・We have *hanami* in spring.
・I had a walk.　・I had a shock.
・I have good friends.
・We have five classes today.
・The room had five windows.

図2　have の入っている文の例

多義語動詞の指導については，ある程度の英語学習を前提としたコア理論や，コーパスを利用したデータ駆動型学習に基づいた方法がある。しかし，今回の目的は英語学習を始めたばかりの児童に多くの例文に接してもらい，一緒に使われている単語から当該動詞の意味を考えてもらうことにあったため，このような指導を行った。

どのような学びが起こっていたか

授業の最後に児童が書いた振り返りシートには，have の意味は思ったより多くあった，動詞だけで意味は決まらない等の「気づき」，頭の中の辞書を少しずつ増やしていく，わからない単語に出会ったらまず考えてみる等の「学習方略」，他の動詞でもやってみたい等の「動機づけ」が書かれていた。班活動の際に提出をしてもらった録音音声からは，友達と協力して日本語と比較・対照しながら話し合っている様子がうかがえた。

小学校外国語の授業内で，まずは自分で類推して，英語の文，動詞の意味を自分の既存の知識を駆使して考えてみる。その後に辞書を引いたり，先生に確認する習慣を身につけてほしいと考えたが，今回の授業で十分手ごたえを感じた。

今後も他の基本動詞で同じようなユニット教材を作成し，それとは別に，英語と日本語の捉え方の違いなどにも焦点を当てた教材を作成中である。その際，今井（2020b）が述べているように，教師が教えるより，児童がことばの表現などに関心を持ち，注意を向ける習慣を身につけ，自分で推測して答えを発見できるような「足場がけ」を工夫して手助けすることが大切になる。今後も，このような実践ができる生きた教材を現場の先生とともに作成していきたいと思う。

◆参考文献

今井むつみ（2007）『レキシコンの構築』岩波書店.
今井むつみ（2020a）『英語独習法』岩波新書.
今井むつみ（2020b）『親子で育てる　ことば力と思考力』筑摩書房.
大束百合子（訳）（1975）『ファース言語論集（Ⅱ）1952–59』研究社.
大和田和治（2013.04–2016.03）「そうだ！大和田先生に聞いてみよう！」『基礎英語 2』NHK 出版.
Firth, J. R, (1957). *Paper in linguistics 1934–1951*. Oxford University Press.
Lewis, M. (1993). *The lexical approach: The state of ELT and a way forward.* Language Teaching Publications.